

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	二日市保養所をめぐる言説：『水子の譜』と『わたしの赤ちゃん』を中心に
Author(s)	王, 璇静
Citation	論叢 国語教育学 , 18 : 35 - 46
Issue Date	2022-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53674
URL	https://doi.org/10.15027/53674
Right	
Relation	



二 二日市保養所をめぐる言説―『水子の譜』と『わたしの赤ちゃん』を中心に―

王 璇静

一 本研究の問い

一九四五年に日本が第二次世界大戦で敗戦したことで、多くの引揚げ者が生まれた。その中には、中国・朝鮮半島や引揚途中に性的暴行を受けた女性たちが数多くいた。強姦により妊娠した女性の墮胎手術や、性病に罹患した女性たちへの治療を行うために、博多や佐世保などの引揚港には医療施設が設置された。福岡県筑紫郡二日市町にあった「二日市保養所」は、そうした医療施設の一つである。外地から上陸した後、「不法妊娠」と診断され墮胎手術を受けた女性たちの数は数百人にのぼる。当時、中絶手術は法律で禁止されていたが、二日市保養所での墮胎で罪に問われた医師、看護婦と女性たちはいなかった。そのため、日本政府がこの強制中絶の事件を黙認していたと推測できる。

戦後、原爆、空襲などの戦争体験を記録したテキストは多く蓄積されたが、この事件に関する記録は多く残されているとは言えない。長い間見落とされた後、近年では阿部安成・加藤聖文、山本めゆなどの研究者が歴史学の領域において二日市保養所で起こった強制中絶事件を議論している¹⁾。一方で、文学の領域では、引揚げに関する議論が盛り上がっているものの、この強制中絶事件をめぐる考察はあまりみられない。

そこで、本研究では、文学の視点から引揚げ女性への強制中絶事件を表現した作品と、そのような表現を生み出した空間に対する考察を行っていく。これによって、この強制中絶事件はどのように表現されているのか、二日市保養所をめぐる言説はどのように引揚げに関わる文学の中に位置付けるのかに応えようとしている。

この問いに答えるために、まず引揚げ女性の強制中絶事件をめぐる言説は多くないが、現在までに残っている記録から戦後の「強制中絶事件」の諸相を確認する。次に、強制中絶事件に関するテキストの中で画期的な一作――『水子の譜…引揚げ孤児と犯された女たちの記録 昭和史の記録』²⁾（以下『水子の譜』と略す）の強制中絶事件の語りを考察する。この作品は当時手術を行った医師と看護婦の証言を中心に展開する作品である。ドキュメンタリーとして『水子の譜』がいかにかにこの事件を再現するのかを分析していく。そして、鈴木政子を書き上げた自分史作品『わたしの赤ちゃん…あなたは、桜の樹の下に眠っているの：』³⁾（以下『わたしの赤ちゃん』と略す）を取り上げたい。この作品は強制中絶手術を受けた女性の立場から語った稀な一人称作品である。『わたしの赤ちゃん』に対する分析によって、この強制中絶事件に関しての言説のもう一つの側面――引揚げ女性の視線を引き出すことができると考えている。

二 二日市保養所をめぐる言説の諸相

本研究では、まず現在までの二日市保養所をめぐる言説を整理していく。墮胎手術を受けた女性や、医療関係者、当時の公的機関の関係者などの語られ方を確認し、数に限りがある記録から強制中絶事件の言説の変容を考察していきたい。

論者が確認したかぎりでは二日市保養所に関する最初の記録は一九五三年『サンデー毎日』に掲載された記事「北満引揚婦人の集団妊娠中絶始末記―赤い兵隊の子が生れぬわけ―」⁴である。暴行を受けた女性の悲惨な体験が描かれた上で、「援護関係者」の活動が高く評価された。

北満から引揚げて来た人たちの中に、暴行によって妊娠した婦人が多数いるのを見て、義憤に駆られた一団の援護関係者が、果敢異常な決意から、優生保護法の制定前としては、到底考えも及ばぬ、集団的な妊娠中絶の手術を極秘のうちに行い、心なき妊娠で、悲嘆にくれていた千余の婦人たちの、引揚げ後の生活に光明を与えた事件があった。

(四頁)

この記事では二日市保養所で起こった事件は「婦人たちの、引揚げ後の生活に光明を与えた事件」だと評価されている。

一九五一年にサンフランシスコ条約が調印され、日本は独立国としての主権を回復した。とともに、一九五〇年代には朝鮮戦争が勃発し、その戦争特需によって日本経済は不況から脱することができた。日本政府への肯定的な評価を求めた時代の背景で、「二日市保

養所」に関しての記録も日本政府への讃歌になったと考えられる。これに対して、テキストでは当時の引揚援護庁長官の斎藤惣一、⁵「友の会」を主催した羽仁とも子は顔を出したが、医師や看護師たちは顔を出さなかった。すなわち、この記事で「光明を与えた事件」を行なった主体は日本政府としての「引揚援護庁」と民間救護の医療関係者が混在している。

一九七七年に、千田夏光が執筆したルポルタージュ『皇后の股肱』⁶の中には「二日市・墮胎医院」という章がある。「二日市・墮胎医院」には、医師の存在を強調するという特徴が見られる。このテキストが最初に書いたように、二日市保養所は「女性たちへの集団処置をした秘密病院の跡であった」「国立や公共の病院ではない、数人の若い医師が開いた病院だったという」。その上、「赤ちゃん」という存在によって、医師が持っている「矛盾」を表現した。

「はじめの動機ですか？（中略）そのとき引揚船のなかで女性の自殺者が出たのが動機でした。」

(七一頁)

「生命の抹殺ですからね、普通の場合妊娠三カ月になったときそれと気づくが、たとえ三カ月でも受胎したときから生命でしょう。それを断つのですからね。でもあのときは中絶手術をしてやらないと母体つまり女性の方が自殺するおそれがあった。」

(注・傍点は原文ママ 七三頁)

その「矛盾」とは、「生命の抹殺」と絶望的な状況にある女性を救うことの両面性である。さらに、千田夏光の作品では、初めて胎児の存在が提起されている。たとえ性的暴行の末に宿った胎児でも、女性たちは「にくしみながらいとおしさをおぼえる（論者注・傍点は原文ママ）」と書かれている。しかしながら、これらの記録にはあまり反響がなかった。

二日市保養所の事件を取り扱い世間の注目を集めたのは、上坪隆の作ったテレビポルターージュである。テレビポルターージュは「引揚港・博多湾」「引揚港・水子のうた」と題し、一九七七年にTBS系ネットワーク、RKB毎日放送制作でそれぞれ放送された。

放送の後「表現メディアの違いから、放送でとりあげることのできなかったものが数多くあった」⁶。ため、上坪隆は一九七九年に『水子の譜』を書き上げた。上坪隆のこの仕事には大きな反響が見られた。『水子の譜』は、援護活動組織者の語り、医師と看護婦の証言と婦人相談所の「問診日誌」などといった詳細な資料を揃えて、二日市保養所で起こったことを再現した。医師と看護婦の語りを中心に展開した作品である『水子の譜』は民間人の救護活動には高い評価を行ったのに対し、日本政府へは批判を打ち出していることも明らかである。

当時の引揚業務はすべてGHQの指令によって行なわれたが、日本政府はGHQに遠慮してか現地から要望してくる引揚船の配船を日一日とひきのばしていた。一日遅れれば、それだけ死者や女性の不幸な事件が増える。

(一七二頁)

上坪は、二日市保養所の出来事は民衆が受けた傷の「動かぬ証拠」として残すべきだと主張した。この作品は「昭和の戦争が何であったかを伝えることができないのではないか。戦争と戦争に繋がる「政治」が、どれほど民衆を傷つけたか」⁷という問いを出した。また、引揚げの過程ではGHQの介入も記述した。

この作品が生まれた七〇年代は激変の年代である。厳しい米ソの冷戦が続くなか、激化するベトナム戦争に対し、日本国内では反米機運が高まった。さらに、ベトナム戦争を契機とした反戦気運や学園紛争から生じた反体制ムードの高まりもあった。戦争または政府というシステムを批判する言論空間が出てくる。一方、一九七二年には日中国交正常化を実現とともに、日本外交が新たな局面に入った。中国とソ連の対立が起こり、日本の周りの政治状況は混乱状態に陥った。そのため、それまでの戦争記憶の遺産と負債を清算する時期になっていた。『水子の譜』は、このような時代背景を持っており、当時の日本政府へ強い批判意識を持っているノンフィクション作品である。

この後、二日市保養所の言説で中心となるのは救護者——医師と看護婦たちである。おそらく『水子の譜』から影響を受けている。

武田繁太郎が書いた『沈黙の四十年——引き揚げ女性強制中絶の記録』。(以下『沈黙の四十年』と略す)の初章「東京からの呼び出し」では、政府が医者たちに女性たちを救護するように命令したという内容がある。民間人の自発的な活動か、政府の命令か援護活動に関しても、語りのすれ違いが見えてくる。

「先生、厚生省は、われわれ医師にとって、堕胎がどんな大罪になるか知っているはずですね」

「むろん、知っている。知ってはいるが。この緊急事態を解決するためには、非常手段に訴えるよりほかはないと言っているんだ。しかし、医師の立場も考慮して。このことに関しては、いっさいの責任は政府がとると言っているんだ」

(二〇頁)

そのほか、二日市保養所に関わる記述は何本かあるが、主に救護者の視点から二日市保養所のことを再現している。語りの中心になるのは医師と看護婦といった救護者である。

そして、鈴木政子が書いた自分史作品『わたしの赤ちゃん』は満州からの引揚げ女性を主人公として書かれた作品であり、強制中絶手術を受けた女性を中心に展開している——稀な存在である。

まとめると、敗戦後、二日市保養所で起こったことは一九七九年に出版された『水子の譜』まで大きく世間に取りざたされることになかった。『水子の譜』は画期的な作品であり、この作品によって、強制中絶事件の問題は本格的に世間に知られるようになった。現在までの記録や文芸作品では、明らかに救護者の行為が主流的な語りとなっており、被害者の女性たちが周辺化された傾向が見えてくる。そして、国あるいは政府がこの事件に関してどのような役割を果たすのかということについても揺れがある。

次の部分では、前述した『水子の譜』と『わたしの赤ちゃん』を取り上げて、二日市保養所で起こった強制中絶事件がどのように表現するのかについて捉えようとしている。

三 記録としての『水子の譜』——強制中絶手術を受けた女性に向けて

『水子の譜』は「聖福寮の孤児たち」と「水子のうた」の二部で構成されている。第一部「聖福寮の孤児たち」は、親を失い身ひとつで戦争被害を引受けざるをえなかった子どもたちを中心に記録されたものである。本研究は第二部「水子のうた」に注目し、作品の中で証言と記録写真など違う視点である二日市保養所の女性たちの認識を捉えて、『水子の譜』に描き出した引揚げ女性の姿を捉えていく。

第二部「水子のうた」では、当時二日市保養所で女性たちの堕胎手術や性病治療にあたった医師や看護婦の証言が記述されている。

この記録の導入部には、カメラマンの飯山達雄が撮った堕胎手術の写真が示される。その記録写真に関して、カメラマンの飯山は「なにかすごいカギのようなもので胎盤から赤ちゃんを離すらしいそれから引っぱり出すものですから、まったく残酷というか恐ろしい手術でした」と語った。中絶手術を受けている「年若い婦人」が白い布で目かくしをされ、撮影された。

このような状況において手術を受けた女性たちはプライバシーが暴かれてしまい、観察される立場に置いたことがわかった。ここで登場した女性は戦争被害の証拠として符号化されたといえるのではない。では、この作品で日本女性の戦争被害をめぐって、批判されたのは何か。前述したように、『水子の譜』には日本政府への明らかな批判意識がある。その批判は当時の引揚げ者が外地に残されたことに止まらず、「日本民族防衛」に関して、以下のように書いている。

日本政府がこの時期外国兵による婦女暴行の事実をたいして憂慮したことは、その犯された女性たちの被害についてではな

かった。むしろ、外国人との性行為によってうつされた性病にその関心が向けられていた。

外国兵から罹患した性病は強力な伝染力をもっており、国内にたちまち広がるに違いない、それこそが問題である、と援護局の首脳は考えた。それはもっぱら防疫の観点から憂慮されたのであり、性病からの「日本民族防衛」であった。

(一七七頁)

山本めゆは、戦争中に強姦された宿った子は（敵の子）と呼ばれ、「その児らがそれを宿した女性よりもむしろ強姦の加害者と同じ視され、被害者側のコミユニティ内で他者化される傾向があること、被害女性もまた児とともに蔑視されていたことを示している」¹¹と指摘した。これはまさしく強制中絶手術を受けた女性が沈黙する傾向がある理由の一つである。戦後戦争体験を語っているテキストは膨大にある。その中、彼女たちは明らかに被害者である一方で、この被害を口に出すことはできない。抑圧された存在として、この「深い傷」に関して、口にすることすらできないことも戦後彼女たちが受けた暴力と言えないではないか。

では、彼女たちが沈黙する中で、当時の医師と看護婦たちはどのようにこの事件を再現するのか。当時の二日市保養所にある医師と看護婦の証言から見てみよう。看護婦の池上は、当時の出来事として、妊娠したために二日市保養所に入院する友人との出会いを語った。

かつての丸顔でふっくらとした笑顔はみじんもなく、池上さんは一瞬ちがう人だと思った。力なくトラックから降りてきて、

池上さんの前で、彼女は小さい声で「こんにちは」といった。池上さんは、「あつ、〇〇さん、まあ、あなた」と声を出したつきり、何も言えなかった。その同級生も同様で、涙だけ頬に伝わっていた。

それから二週間、池上さんは彼女とは一言も話さなかった。日に一度検温にその部屋に出入りしただけであった。手術の時も立会わなかった。

帰るとき、

「どうもありがとう」

「おだいじに」

と短い会話を交わしただけだった。

「久しぶりですし、話し合いたかったんですけど、いま話したらいけないとき思いました。もう自分だけが何事もなく、相手の方がこういう悲劇にあっているのを、いかにもさぐるような気がしました。その時も結婚しておられたはずでした。ただ一人で、この保養所の門を出て行った後姿はいまでもあざやかに残っています」

(一九七―一九八頁)

看護婦の池上さんの語りを見ると、「暴行を受けた女性」と「他の引揚げ者」の境界線が見えてきた。お腹にいる赤ちゃんと同じように、この二日市保養所に入院した女性も他者化された。これらの女性たちは、引揚げを生き抜いたサバイバーと言える。だが、強制中絶を受けた女性たちは戦後に向けて行くことは決して容易ではない。「結婚しておられたはずでした」が、「ただ一人で、保養所の門を出て行った」という姿から、たとえ家族関係の中でも女性は独自

にこの傷に直面することを明らかにした。戦後の生活を始めるために、彼女たちはこの深い傷を自分だけで抱えて行くくない。では、この語ることでできない傷を橋爪医師はどのように証言で表現したのかを考察していく。

「ゆっくり静養している間にだんだん元気を回復していく、それは肉体ばかりではなく、精神的にもとに戻っていくことだと考えたこともあります。」

―退院する頃の患者さんはどんな感じでしたか。

「まったくその着いた時とはみちがえるようです。こんな人が入院していたかと思うぐらいでした。」

きたときは、妙な恰好で、沈むというよりはほんとうに暗いというのがびつたりの表情でしたが、帰るときはみちがえるようでしたね。まあ、看護婦さんにちよつと口紅でもつけてもらって、というふうで女性として帰っていくような気がしたです。」

(二〇二〜二〇三頁)

上坪隆とのやり取りの中で、橋爪医師は二日市保養所に入院した女たちの変化について話している。二日市保養所に入院した女たちの変化について、来た時は「ほんとうに暗い」表情だったが、帰る時は「看護婦さんにちよつと口紅でもつけてもらって」女性として帰っていくと橋爪医師が言っている。そして、二日市保養所では「女性たちは肉体ばかりではなく、精神的にもとに戻っていく」とも橋爪医師は言う。これは女性たちの偽装を「精神的にもとに戻っていく」ことだと橋爪医師が安易に捉えているのではないか。

橋爪医師は、医者つまり救護者の立場で被害者の女性が理解できないということ結論づけることもできる。だが、続けて読むと、そうではないと論者は気づいた。

橋爪さんにとっては、いまだに二日市でのことがなまなましく脳裏に焼きついて離れないようであった。(中略)当時の光景を思うと橋爪さんでなくとも、そのおぞましさに戦慄する。

「いろいろな方が見えました。親の見ている前で強姦されたという娘さんを母親が連れてきてましたけど、思い出している二人で泣いてました。まあなんでしたけど……。その方も元気で帰りました」「元気で」というところに力をいれて言った。

私は三度橋爪さんを訪ねた。そのつど彼は玄関まで送りに出て、

「上坪さん、この話はもうこれまでにしましょう」といった。私もいつもそう思っては彼の家を辞した。

(注：傍点は原文ママ 二〇五頁)

橋爪医師は最後の話で、「親の見ている前で強姦されたという娘さん」に言及した。「その方も元気で帰りました」と橋爪医師は言ったが、「元気で」というところに力を入れて言った」と上坪隆は書いている。橋爪医師は、彼女たちが「元気」になることを信じていないことが推測できるのではないか。あくまで女性たちの心身の回復は医師としての希望である。なぜというと、橋爪医師との対話の過程で、橋爪医師の身体表現に関して、「橋爪さんはなにかをうち消すように首を横にふった」、「橋爪さんはコーヒーをすすった。表情がややほぐれてきたようであった」と上坪が書いた。語る内容と

ボディランゲージの矛盾から、橋爪医師が彼女たちは元気に戻れないことが気づいたことがわかった。辛い体験に立ち会っていると、手術を受けた女性と救護者の医師、看護婦とも目をそらして、「元氣」の見せかけを維持している。

強制中絶手術を行なった医師と看護婦の証言のほか、「中原療養所」の福土房の証言をも引き入れた。上坪隆の説明によれば、「中原療養所」は性病と不法妊娠の女性たちに心身とも回復するために設置した療養所である。そこで、福土房は生活指導員の仕事をした。福土房の証言を引用してみよう。

「引揚げの途中である村を通過する際に人質を出すという。それも今でもなんていうのかしら、男と女の問題でいつも女が犠牲になるでしょう。人質を出すという発想が日本側の引率している団長さんから出たのか、あるいは向こうから要求されたのか、それはわかりませんがいずれにしても何人かの『生けにえ』を出して部落を通過させてもらう。

そういった場合にどんな人が選ばれるかというと、だいたいまず最初の水商売をしていた人、その次に未亡人だったというんですね。それから夫が出征していて奥さんだけが引揚げてくる人。まあ夫にわからないだろうということでしょうけど。夫婦そろっている方はなかったそうです。

団長になった男の人のそういう考えと、人質を出せばなんとかそこを通してもらえるという考えがあったわけね、そのことを学校の先生をしていらした未亡人の方がとても悔んでいました。

それから開拓団の娘さんなんかもそうでしたけど、人質に選

ばれて強制されて行くでしょう。そして朝帰ってくると、もうみんなが、同じ日本人の団員が白い眼でみているいろいろな思いのね。それで人質にされた方はずっとその後非常につらい思いをして内地まで引揚げてきた、ということね。(後略)」

(二三四～二三五頁)

福土の証言により、女性が受けた性的被害に関して、外国兵士の加害者と日本人女性の被害者という単純な構造の他、引揚げ者の内部に潜在した構図が分かる。引揚げ者団体が村を通過するために、女性は「人質」として引揚げ途中に通過する村に出されることがあった。性暴力と引揚げ者内部にある構図に関連付けて、山本は以下のように指摘した。

性暴力の質の変化(論者注…襲撃する「戦利品としてのタイプ」から日常化した「娯乐的レイプ」へ)に伴って姿を現したのが、「強姦者」と「被強姦者」の周辺に存在していた「仲介者」や「受益者」などのアクターである。このことは性暴力を戦争につきものの悲劇とするような宿命論を根底から覆す。なぜならこうした宿命論は性暴力を「ソ連兵」対「日本人引揚げ者」のようにナショナルな対立に還元してきたが、「仲介者」や「受益者」の存在は引揚げ者コミュニティ内部の葛藤を鋭く露わにするからだ。¹²⁾

山本は引揚げ者の内部に存在する「仲介者」や「受益者」を指摘した。その上、犠牲にされた女性の中にも違いがある。福土の証言が示したように、女性たちは「水商売」をする女性、「未亡人」の

女性、「夫が出征して」いる「奥さん」という順で「生贄」として送り出された。「夫婦」が揃っていれば、女性たちは「生贄」として犠牲にならずに済む。すなわち、女性は性的な資源であり、男性の所屬品である。暴行を受けた女性たちの傷より、男性の気持ちがいちより重要である。夫がいない女性の場合、あるいは夫が彼女の受けた暴行を知り得ない立場にある女性の場合、それらの女性が「人質」になることで発生するリスクは低い。そして、「水商売」をすすめる女性は不潔な存在で、犠牲にしても構わないという傾向がある。また、「村を通過する」ために、引揚げ団体のために犠牲になった女性は同じ日本人の団員から白い眼で見られる。前述したように、暴行を受けた女性たちは他の日本人から蔑視された。このような内部に起こした不信、裏切り、差別もそれらの女性の受ける傷ではないか。

まとめると、『水子の譜』は医師と看護婦などの民間援護の関係者の証言から、日本政府への批判する姿勢に対して、民間救護活動を高く評価し、民間の救護者への敬意を示している。そして、この救護者の証言から、それらの引揚げ女性の戦争被害を日本政府によりもたらす被害、被害を表現できない苦痛、および引揚げ内部に存在する被害という多層の被害が存在していることが読み取れた。

四 物語としての『わたしの赤ちゃん』—強制中絶手術を受けた女性と「赤ちゃん」

『水子の譜』のような記録的な作品に対して、二日市保養所に関する物語的な性格の作品もある。『わたしの赤ちゃん』は第十八回北九州自分史文学賞大賞の受賞作である。しかし、作者の経歴を確認すると、作品に書いてある出来事は作家自身の体験ではないこと

がわかった。鈴木政子は一九三四年、福島県に生まれた。一九三九年、両親の転勤に伴い満州に渡り、一九四六年に帰国した。在満邦人として敗戦を迎え、その直後から引揚げまで、四人の弟妹を收容所生活で失った。『わたしの赤ちゃん』の「あとがき」では、「夫と子どもがいる收容所のまんなかで、いやがる女性を引きずり出し犯すソ連兵たちのこと。昼夜を問わず、引き出される悲鳴を聞いていたこと。」¹³と書いた。

このような事実を若い人たちに伝えることが「生かされた私の役割」だという考えから、鈴木政子は聞き書きにより、資料を集めて、『わたしの赤ちゃん』という作品を執筆した。まずは作品のあらすじを紹介する。

主人公の千代は十六歳のときに満州に渡り、わずか二年後、現地で終戦を迎えた。收容所の生活を体験し、錦州へ脱走した。色々経験した後、博多に引揚げた。收容所にいた間に暴行を受け、妊娠したために、上陸した後で、二日市保養所で強制中絶手術を受けた。その後、中国への訪問し、二日市保養所に「赤ちゃん」を探したことがあった。

この作品は自分史と言えるかどうかをめぐって、当時の審査員たちは議論した。佐木隆三は「あなたが書かなかつたら、「高橋千代」の筆舌に尽くしがたい体験は、歴史の闇に消えてしまった。」と高く評価した。佐木は「高橋千代」はモニタージュリアした人物ではなく、輪郭のはっきりした実在の女性だろうと判断した。つまり、自分史というジャンルにおいて、他人が経験したことを、聞き書きであっても表現することが許されたと主張した¹⁴。それに対して、もう一人の審査員柴田翔は違う意見を持っている。選評「時代と自分史」では「聞き書き取材による自分史文学は、この作品あたりが

きりの線だという感想はやはり否めない。¹⁵ という意見を素直に述べた。この議論の延長線で、釋七月子は自分史における「虚構」に注目し、『わたしの赤ちゃん』は文字通りの自分史とは違い、虚構性が強いと指摘した。作品が、「三人の人物を合体させて一人の主人公を創作する」という「虚構」であったと論じた¹⁶。

釋が論じたように、『わたしの赤ちゃん』は作者鈴木政子一人の記憶ではなくて、他者の記憶も描き出したことは疑いない。「自分の記憶の中に他者の記憶が入り込む」というより、むしろこの作品において鈴木政子は他人の引揚げ体験を共有している。性的暴行を受けた千代、子供を殺した母親の菊枝、妊娠した自殺の女性……鈴木政子はそれらの女性体験を全て体験し、共有した。「引揚げ女性」という集団の内部にも「子どもを亡くした母親」という団体が見えてくる。このような体験の共有と集団性は作品の中では確認できる。

上京する前日、進藤家の墓に詣でた。亡くなった子どもたちの戒名も墓石に刻みこまれていた。手を合わせた千代に、四人の子と「もうひとりの子」が「安心して行っておいでよ、わたしたち、千代ちゃんを見守っているからね」と言っている声が耳に入ってくるのを感じた。

(八三頁)

十一月から五月まで閉山となり、雪に埋もれるという。真っ白い山々のなかに、背の高い御本尊さまはたくさんの子どもを抱いて、スクツと立っておられるだろう。

(一六四頁)

本文の中に何箇所も「子どもたち」「赤ちゃんたち」という表現が出てくる。千代は自分の子どもを亡くしたが、墓の前で想像した子どもの声は「わたしたち」と自称した。すなわち、「子どもを亡くした母親」は人生体験を共通した女性たちを指し、自然と集団性を持つことになった。では、「赤ちゃん」は「母」の立場からどのように表現されるのか。そこで、鈴木政子が引揚げ女性を主体として語った戦争体験について考察していこう。

作品の『水子の譜』との出会い」という章では、千代は『水子の譜』を読む場面と心理活動を描き出した。少し本文引用してみよう。

前半の会話には、自分が体験したことを思い返すように「そうよ、お世話になったわ」と感謝の心で読んだ。

が、続けて語られている「うぶ声をあげて生まれた赤ちゃん」の処置を知り、一瞬、息が止まった。

(一四八頁)

この部分には千代が『水子の譜』を読んでいる過程で、感情が変化したことがはっきりと見られる。『水子の譜』の中で赤ちゃんの処置に関しては、「この方法（論者注…穿頭手術）は衰弱した母体を保護する目的もあったし、同時に泣き声をうちけすことにもなった。」¹⁷と表現した。『水子の譜』では「赤ちゃん」の存在をあまり認めていないのであるが、『わたしの赤ちゃん』の中では、「母親」としての女たちは子供への同情、疚しい気持ちを持っている。では、暴行を受けたことで、望ましくない妊娠とよく言われている

が、『わたしの赤ちゃん』にはこの「赤ちゃん」は千代にとってどのような存在であるのか。

まだ張っている乳房がうずく。両腕が自然に腹部に行く。小さくなったお腹には動きもなく、「あの子はいないのだ」と今までにない寂寥感におそわれる。

(中略)

「これがわたしの戦争だったのだ。からだ半分、心のすべてを奪われた。これから生きていく道は平坦ではないだろう。船から飛び降りようとも考えたが、それも果たせず、神様に、いやあの子に『生きていきなさい』と導かれたのだ。あの子が与えてくれた命を大事にしよう。生きよう、がんばろう」

(七三頁)

中絶手術を受けた後、千代は「あの子はいないのだ」と今までにない寂寥感を感じた。「からだ半分、心のすべてを奪われた」と表現した。主流的な「人道的な行為」の認識とは違う側面が見えてくる。お腹にいた「赤ちゃん」は望ましくない存在だが、墮胎した後、母親を守る存在になった。すなわち、千代は、「赤ちゃん」が母親のために犠牲となった強い存在だった。この強さと神聖さは千代がお地蔵さまの前にいる場面に現れている。

「ああー、来てよかった。ご本尊様にしっかりと抱かれている『わたしの赤ちゃん』に会えました。」

千代は正座して、手を合わせ、お地蔵さまに抱かれている赤児をじっとみつめる。

いま沈もうとしている夕日を背に、あかね色につつまれた赤児の口からささやくような声が聞こえてきた。

「おかあさん、ぼくね、温泉のお湯のなかでだっこしてもらったとき嬉しかった。

ほんとうは生きたかったの。でもおかあさんがとても苦しうだったので、産まれたとき、おかあさんに『ぼくだよ』って泣いて知らせたの。そして『さようなら』したの。

でも、ちつともうらんだりしていないよ。おかあさんを、ずっと守ってあげようと思っていたんだよ。

ぼくは、あのとまのまま、小さいけれど、ずーっと、いつまでも、ここで待っているからね」

(一六三頁)

『わたしの赤ちゃん』の最終章「かあさんを見守ってくれたのね」では、千代と「赤ちゃん」は対話の形で直接に話した。千代は「赤ちゃん」に対して、「あなたが足でおなかをけり、動くのを感じました。すぐに消されてしまいました、小さい産声も聞きませんでした。わたしの赤ちゃんであることはたしかです」という告白をした。

暴行を受けたことで妊娠した「赤ちゃん」、生まれていない「赤ちゃん」に対して、憎しみでなく、すぐく感動的な表現、「足でおなかをけり」のような私的な話を通して、「赤ちゃん」の存在を認めている。このような告白に対して、「赤ちゃん」は「温泉のお湯のなかでだっこしてもらったとき嬉しかった」、「おかあさんがとても苦しうだった」と母親への理解を示し、「おかあさんを、ずっと守ってあげよう」と返事をしたと千代は想像した。無論、「赤ち

やん」は喋ることは出来ず、この表現は千代が期待している返事である。これにより、母としての千代が持っている「赤ちゃん」に対する罪悪感、感謝の気持ちが見えなくなった。一方で、暴行をした男性に関してはあまり触れていなかった。この「母」と「赤ちゃん」の構図からは、暴行をした男性が外れていることも確認できた。従来の研究で「敵の子」として他者化された「赤ちゃん」はこの一人称の作品で神聖化されたことがわかった。

五 結び

本研究では、まず戦後日本における二日市保養所の言説を整理した。この事件は歴史の裏面に隠されたが、今まで二日市保養所の言説は中絶手術を受けた女性が周辺化されたという傾向が見られた。有数の資料から見ると、一九五〇年代にできた雑誌記事「北満引揚婦人の集団妊娠中絶始末記」は強制中絶事件を高く評価した上で、日本政府と民間救護者を混ぜ込んで、引揚げ過程の救護活動への讃歌となった。その後、「亡くした赤ちゃん」に目を向けて、女性たちの傷を表現する記述「二日市・墮胎医療院」もあったが、注目されていなかった。一九七九年に上坪が書いた『水子の譜』は女性たちが受けた被害を強く表現した上で、日本政府への批判と民間救護の関係者を肯定した。この後、二日市保養所に関する記述に関して、何冊の作品が出版されたが民間の救護活動に賞賛する物になっている傾向が見える。このような言説空間で、大きな影響を与えた作品『水子の譜』と一人称で再現した自分史『わたしの赤ちゃん』を取り上げて考察した。

二日市保養所の事件を記述する作品の中で、『水子の譜』は分量の厚み、資料の充実性などの理由で、非常に重要な作品である。

『水子の譜』の中で日本政府への批判は明らかである上に、中絶手術を受けた女性の戦争被害も多層化して、表現した。女性達が受けた性的暴力、人種主義からもたらす女性の身体支配、と引揚げ団体の内部にある暴力、といった多層の被害が読み取れた。

また、鈴木政子の『わたしの赤ちゃん』が持っている物語の性格により、主人公千代が「赤ちゃん」への認識から、被害者の女性の主体性を表明した。一人称の作品として、「母」と「子」の構図で改めて「暴行を受けて宿った子ども」を表している。従来は不潔な存在と認識される「赤ちゃん」は亡くした時点から神聖性を獲得した。これは強制中絶手術を受けた女性の独特な表現だと考えている。

注

¹ 阿部安成・加藤聖文では強制中絶事件に関して次のように述べられている。「日本において国家黙認の下で、大量的の強制墮胎がおこなわれ、「混血児」が徹底的に抹殺された事実、墮胎手術を受けた女性や治療に当たった関係者が重く口を閉ざしながらも、歴史から完全に忘れ去られることに対するやり切れない思いをどのように受け止めればいいのか、それに対して戦後歴史学はいまなお応えてはいない。」(阿部安成・加藤聖文「引揚げ」という歴史の問い方(下)」「彦根論叢」三四九号、二〇〇四、六四頁)。

その後、山本めゆは「それから(論者注・阿部安成・加藤聖文らの論) 10年が経過した今日、戦争と性暴力に関連する一部の言論空間では、「引揚げ」「性暴力」「中絶」の三題断は大変な人気を博し、忘却どころか喧騒の只中にあるといつてよい。」(中略)「引揚げ女性」の経験は、「日本人女性も彼らに強姦された」などとして、排外主義的暴力や韓国・中国攻撃を正当化する材料として利用 abuse されているのだ」と論じた。(山本めゆ「生存者の帰還…引揚げ援護事業とジェンダー化された(境界)」「ジェンダー研究」十七号、二〇一五、六九頁)

² 上坪隆『水子の譜…引揚げ孤児と犯された女たちの記録 昭和史の記録』(現代史出版会、一九七九)

³ 鈴木政子『わたしの赤ちゃん…あなたは、桜の樹の下に眠っているの

- …(学習研究社、二〇〇八)
- 4 「北満引揚婦人の集団妊娠中絶始末記―赤い兵隊の子が生れぬわけ」
『サンデー毎日』一九五三)
- 5 千田夏光『皇后の股肱』(晩聲社、一九七七)
- 6 上坪隆『水子の譜』(現代史出版会、一九七九、二四二頁)
- 7 上坪隆『水子の譜』(現代史出版会、一九七九、一七三頁)
- 8 武田繁太郎『沈黙の四十年―引き揚げ女性強制中絶の記録』(中央公論社、一九八五)
- 9 そのほか、市川和広の『三つの願い―隠された戦後引揚げの悲劇』(星雲社、二〇一四)では看護婦の証言活動を手がかりとして、救護者の視点から当時の出来事を再現した。下川正晴は『忘却の引揚げ史―泉靖一と二日市保養所』(弦書房、二〇一七)において、「泉靖一」という文化人類学者を中心に、二日市保養所の誕生とその真実を記録した。そのほか、大津誠一郎は医師たちと看護婦たちが引揚げ女性を救済した小説『哀しい運命の人々―二日市保養所』(文芸社、二〇二〇年)を書き上げた。
- ¹⁰ 上坪隆、『水子の譜』(一九七九、現代史出版会、一六八頁)
- ¹¹ 山本めゆ「生存者の帰還：引揚援護事業とジェンダー化された〈境界〉」、『ジェンダー研究』十七号、二〇一五、七二頁)
- ¹² 山本めゆ「父の痕跡―引揚援護事業に刻印された性暴力と『混血』の忌避」、『次世代研究プロジェクトワーキングペーパー』、二〇一二、三三頁)
- ¹³ 鈴木政子『わたしの赤ちゃん』(二〇〇八、学習研究社、一六七頁)
- ¹⁴ 佐木隆三『わたしの赤ちゃん』に辿り着くまで―第18回北九州市自分史文学賞選評』『わたしの赤ちゃん』(二〇〇八、学習研究社、一七九頁)
- ¹⁵ 柴田翔「時代と自分史：第18回北九州市自分史文学賞選評」『わたしの赤ちゃん』(二〇〇八、学習研究社、一七三頁)
- ¹⁶ 釋七月子「自分史における「虚構」―鈴木政子『わたしの赤ちゃん』を中心に―」『自分史』は語る』(二〇二〇、晃洋書房、一八四―二〇三頁)
- ¹⁷ 上坪隆、『水子の譜』(現代史出版会、一九七九、一九六頁)